

平成29年度大学コンソーシアムとちぎ「大学を超えた共同研究支援事業」報告書

所属機関名	作新学院大学女子短期大学部
団体・グループ等名	子どもの育ちと保護者支援を考える会
研究代表者名 (所属部署)	宍戸 良子 作新学院大学女子短期大学部 幼児教育科 講師
研究連携担当者名及び連絡先	・丸橋 亮子 (宇都宮共和大学 子ども生活学部 講師) ・齋藤 崇 (足利短期大学 こども学科 非常勤講師)
研究連携校名	・宇都宮共和大学 ・足利短期大学 ・作新学院大学女子短期大学部
関連自治体・経済団体等名	

1. 研究事業名	親子でつくる子どもの育ちポर्टフォリオ講座ー子ども理解のためのアセスメント方法「ラーニング・ストーリー」を活用した子育て支援ー
2. 実施年度	平成29年度
3. 研究成果等	<p><b>1. 研究の概要</b></p> <p>本研究事業は、独自の子育て支援プログラムの開発及びその効果の検証を試み、子育て支援の一助を担う目的として、平成28年度大学コンソーシアムとちぎ「大学を超えた共同研究支援事業」として採択された事業の継続研究である。</p> <p>子育て支援プログラムを「親子でつくる子どもの育ちポर्टフォリオ講座」と名付け、自ら参加を希望する子ども(就学前)とその保護者を対象に、子どもには、自発的に遊びに向かうことを意図した遊び及び遊び環境の提供を行い、保護者には、(1)ラーニング・ストーリー理論(Carr, 2001)に基づく子どもの育ちのプロセスを捉える視点の伝達、(2)子どもの学びの姿を捉えたポर्टフォリオ作成の援助、助言を行った。本講座は、2回完結・各2時間の講座とした。</p> <p>昨年度の取組みの結果、妥当な規模及び講座回数、調査対象者の需要や実施運営における配慮すべき事項等が見えてきた。それらを踏まえ、今年度も継続実施し、保護者に対する子どもの育ちのプロセスを捉える視点の伝達を目指し、ラーニング・ストーリーの視点を取り入れた子育て支援プログラムにおいて、保護者の子どもの姿を捉える視点、育児効力感、対児感情などがどのように変容するのかを明らかにしていきたいと考えた。</p> <p>研究の方法は、本講座に参加した保護者を対象に、「講座での気づき・発見・感想」「ポर्टフォリオを作成してよかった点」「講座前後の子どもの見方の変化への気づき」を問う自由記述及び育児効力感尺度(田坂、2003)と対児感情尺度(花沢、1992)を用いた質問紙調査を実施した。調査に同意した調査対象者からのみ回答を得て、テキストマイニングによる形態素分析及び共起ネットワークの分析及びコレスポネンス分析を実施した。なお、コレスポネンス分析を実施する際には、育児効力感尺度と対児感情尺度の得点の高群、中群、低群に分けて分析を実施した。</p> <p>なお、本研究は、作新学院大学・作新学院大学女子短期大学部研究倫理審査委員会の承認を得ている(承認番号#2017-5)。</p> <p><b>2. 研究の成果</b></p> <p>(1) 成果① 子育て支援プログラム「親子でつくる子どもの育ちポर्टフォリオ講座」の実施</p>

昨年度に引き続き、子育て支援プログラム「親子でつくる子どもの育ちポートフォリオ講座」を実施した。詳細は、以下のとおりである。

【実施場所】芳賀町生涯学習センター1階 ふれあい室

【実施期間】①2018年3月17日（土）13:00～15:00

②2018年3月31日（土）13:00～15:00

【申込み・参加者】

申込み：7組19名（子ども：1歳2ヶ月～2歳7ヶ月）

当日の参加：①6組16名 ボランティア1名

②5組12名 ボランティア2名

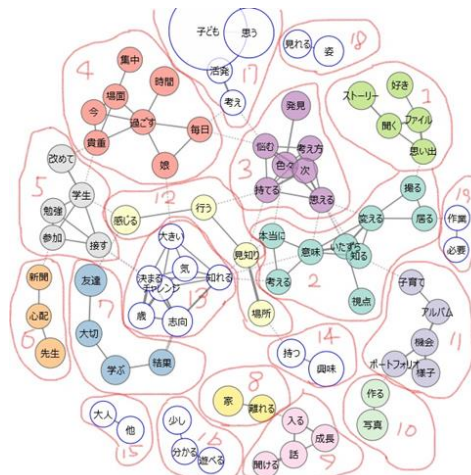
【実施内容】保護者：ポートフォリオ講座、  
子ども：新聞紙遊びを同時進行で行った。



## （2）成果② 本講座に参加した保護者に対するアンケート結果及び考察

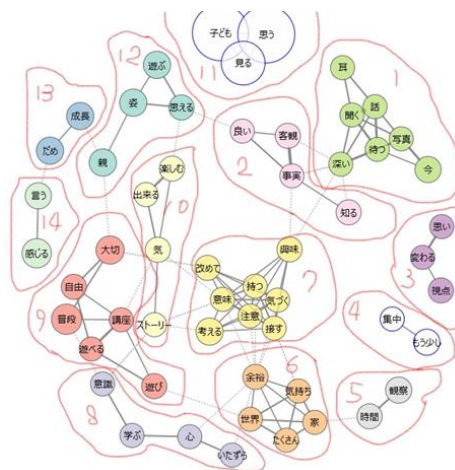
研究協力者は、2017年～2018年に実施した「親子でつくる子どもの育ちポートフォリオ講座」に参加する保護者62名で、欠損値が1であるため、分析対象者は女性n=61名（M=35.67歳 SD=4.88）である。紙面の関係上、分析の一部を抜粋して掲載する。

「講座での気づき・発見・感想」の共起ネットワーク図においては、図1のよ



うに①思い出となる②視点を変えて意味を考える③色々な考え方が持てる④貴重な時間を過ごす⑤参加して勉強になった⑥遊んでくれるか心配だった⑦友達の大切さを学ぶ⑧家では離れられる⑨成長を実感できた⑩写真を撮って作る⑪よい機会になった⑫場見知りしなかった⑬志向が決まるのが知れた⑭興味を持った⑮他の大人と遊ぶのが見れた⑯少し分かった⑰活発の意味に気づく⑱姿が見れる⑲作業をあきらめる必要があったという19のまとまりになった。

図1 講座での気づき・発見・感想



次に「ポートフォリオを作成して良かった点」の共起ネットワーク図においては、図2のように、①耳を傾けて話を聞く②客観的に事実を知る③視点が変わる④集中している時にもう少し近づく⑤時間をかけて観察する⑥気持ちに余裕を持つ⑦興味に気づく⑧学びを意識する⑨講座で自由に遊べた⑩ストーリーに気づく⑪子どもをもっと見ようと思う⑫遊ぶ姿を見たい⑬だめと言わない⑭変化を感じるという14のまとまりになった。

図2 ポートフォリオを作成して良かった点

最後に、「講座前後の子どもの見方の変化への気づき」の共起ネットワーク図においては、①遊びの中に学びがある②遊ぶ姿をたくさん見つける③今後もポートフォリオを作る④親が子どもの目線に立つことが大切⑤観察して考えること

ができた⑥写真を見て文字にする⑦読み聞かせて自己肯定感が高まる⑧家でも作れて楽しい⑨子どもを思う⑩参加して初めて知った⑪意識して形にする⑫書いて残せる⑬今までにない良い機会という13のまとまりになった。

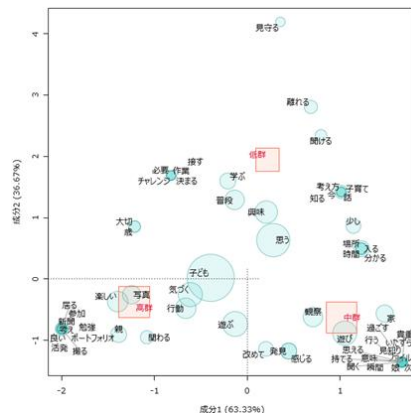


図3 気づき・発見・感想と育児効力感

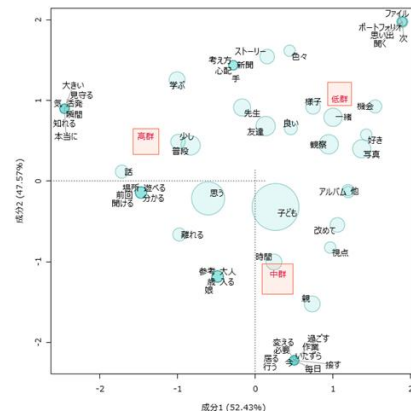


図4 気づき・発見・感想と対児感情

図3は、育児効力感が高い群、中程度の群、低い群の3群に分けた時に、それぞれの群の保護者がどのような抽出語を使用して、自由記述を回答しているかという傾向をグラフで表している。気づき・発見・感想を求められた時に、育児効力感の高低の差によって、傾向が異なることがわかった。

同様に、図4は対児感情の拮抗指数の高群、中群、低群を分けた結果、気づき・発見・感想を求められた際に傾向が異なることがわかった。

抽出語から、視点の伝達により、保護者が①子どもが遊びや生活の中で、主体的に学び続けている存在であることを改めて知るきっかけとなること、②育ちは点で捉えるものではなく、ストーリーに目を向けることが重要であると学んだこと、③ポートフォリオが子ども理解を支える媒体として活用できることを知り、今後も継続活用したいと思ったことが見えてくる。子育て支援においてラーニング・ストーリーを導入することは、保護者の子どもの捉え方を変容させる可能性を含んでいると言えるだろう。さらに、保護者の育児効力観や対児感情を意識してプログラムを実施することができれば、より視点の伝達の効果を高めることができる可能性が示唆された。

### (3) 成果③ 学会での成果発表

本研究成果を、以下の学会で口頭発表した。

【学会名】日本保育学会第71回大会 【会場】宮城学院女子大学

【日時】2018年5月12日(土) 13:00~15:00

【タイトル】「ラーニング・ストーリーがひろげた子育て支援の可能性—親子でつくる子どもの育ちポートフォリオ講座の実践を通して—」 [K-A-10-059]

4. 今後の課題及び発展性

現時点では、まだ調査対象者数が62名とわずかであることから、本子育て支援プログラムを継続実施し、調査対象者数を増やしながらか、効果分析を継続して行っていくことが、今後の課題である。

学会における発表の場では、フロアの保育者らより、本講座内容に対して高い関心が寄せられた。2年間講座を実施するなかで、保護者及び子どもにとって満足度が高い講座であることが見えてきたため、今後は、保育者等が本子育て支援プログラムを活用できるよう、教材開発を視野に入れながら、継続的に研究を進めていきたい。